

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：高齢社会における地域福祉交通計画づくりの実践	
日付： 6月14日 日曜日，セッション時間：14：20～15：50	
オーガナイザー・司会者名（所属）：北川博巳（兵庫県立福祉のまちづくり研究所）	
討 議 内 容	<p>セッション全体：</p> <p>今回発表された論文は、都市郊外や農村地域における公共交通について、「どのような交通手段を提供すべきか」、「どのようなスキームで実施してゆくのか」、「誰が主体となって提供していくのか」を示したものが多かった。全体を通じた質疑として、1) 市民参加・住民参画の必要性を指摘したものが多かったが、住民参画があると「良いものができる」というだけに留まっているように思える。具体的に地域住民がどのように参画し、それによって交通サービスの質をどう高めているのか？ 2) 行政が「シビルミニマム」を設定したなかで、市民に運行委託をすることが果たして妥当なのか？ 3) 人がどこで生活すべきかを考えた時、市場に乗る交通サービスと、そうではない交通サービスとでは別個に捉えるべきではなからうかなどの活発な討議がなされた。</p>
	<p>(250) 猪井博人（大阪大学大学院）：</p> <p>○市民に運行委託をすることの妥当性について</p> <p>行政の運行委託に関して、「受託者は、町が実施する市町村運営有償運送事業よりもサービス水準（運行日数等）が低下してはならないことや利用者負担が増加しないことを条件とする」と本文に記載したのは、市民に運行を委託する際のインセンティブとしての位置づけである。</p>
	<p>(251) 福本雅之（名古屋大学大学院）：</p> <p>○シビルミニマムの概念は必ずしも一意的ではないのではないか？移動困難者へのシビルミニマムや運行形態モードのシビルミニマムの両側面があるのではないかと？</p> <p>これについては運営主体についての議論もある。例えば、NPO 等が運営する STS と、行政が運営するコミュニティバスがあるが、本来ならば、コミュニティバスは NPO 等が運営し、行政が STS を運営すべきではないか。</p> <p>○計算結果を STS の計画論としてどのように組み立てるのか？ STS の需要は、個人の身体属性によっても個別に捉える必要もある（コメント）</p>
	<p>(252) 竹内龍介（八千代エンジニアリング株）：</p> <p>○対象地域の場合、試行段階は行政負担だが実施段階で住民負担になる。実施に移行できるのか？対象地域の場合、地域組織がコミュニティに定着している一方で、行政が新たな交通サービスの負担をしないルールが前提となっており、住民参画を進めることが必要となった。ただし、地域住民は行政が公共交通に対して「金」を出すことが一番容易であるとの反応であった。計画や運営面に地域住民が継続的に参画していけるかどうかは課題が残る。</p>

(253) 磯部友彦 (中部大学) :

○対象地域の住民参加の背景について

紹介した事例の場合は、住民参画ではなく、行政と事業者で決めたルールに基づいて実施されている。その展開のなかで、住民側もスタートラインに立つことになり、現行の負担(タクシー運賃の1/2補助)では高額であるとの声が高くなるようになってきた。

(254) 竹林弘晃 (㈱建設技術研究所) :

○デマンド型交通の運行範囲や経費、県の補助制度の有無について

デマンド型交通は、まちなかと谷あいを運行範囲としており、運行距離として10km以内である。また、運行費用は60円/kmで計算しており、県の支援制度はない。

○「廃止後の地域住民モビリティ確保の一方策として、当事例が参考になれば幸いである」とあるが、事例が果たして路線バス全面撤退の典型的な事例となりうるのだろうか？(コメント)

※発表件数に応じて適宜追加してください。

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：長寿社会を支援する地域福祉交通計画とは？	
日付： 6月15日 日曜日，セッション時間：16：00～17：00	
オーガナイザー・司会者名：北川博巳（兵庫県立福祉のまちづくり研究所）、磯部友彦（中部大学）	
討議内容	<p>セッション全体：</p> <p>高齢社会を迎えるにあたっての地域福祉交通のあり方について、安全な移動のできる歩行空間のあり方、生きがいづくりイベントのための交通手段など、多様な視点からの研究発表がなされた。また、整備に向けての課題や研究発表以外に関する問題発掘など、活発な討議ができた。</p>
	<p>(255) 萩原 亨（北海道大学大学院）：</p> <p>○乱横断の発生についてどのような対策をしたのか？適正な横断歩道の間隔は？</p> <p>対策の働きかけはしているが、横断歩道整備は信号設置とセットなので新たに設置されにくい部分がある。経験的には100m くらいの間隔で、車を遮断するような方法も重要と考えている。</p>
	<p>(256) 沼尻恵子（国土技術研究センター）：</p> <p>○認知症高齢者の追跡調査は何名くらいしたのか？また、他の事例はないのか？</p> <p>今回の事例に加えて、グループホームの入所者を対象にした。追跡調査は背後についていると本人が気にして難しい部分も多かった。また、今回の調査を通じて、認知症高齢者の歩行問題は目的地がわからない問題と危険問題の2つが内在していることが分かった。習慣化される行動については問題のない部分もある。また、他事例は建築分野で少し研究が見られる程度である。</p>
	<p>(257) 山田 稔（茨城大学）：</p> <p>○イベントに誘っても「行かない」人は必ず出てくると思うが、その対応は？</p> <p>イベントの内容次第によって、互いに仲良くなれないとうまくいかないため、課題としては出てきた。また、友人など既知の間柄の人との初めての人との関係についても参加に差が出ている。また、今回の事例は小学校区でやっており、移動距離の問題を解決することも課題である</p>
	<p>(258) 北川博巳（兵庫県立福祉のまちづくり研究所）：</p> <p>セッションを総括する発表のため、特段なかった。</p>

※発表件数に応じて適宜追加してください。